



創立75周年を迎えて —公益法人日産厚生会の歴史と未来

公益財団法人日産厚生会 会長 中嶋 昭

公益財団法人日産厚生会は創立75周年を迎えることになりました。

創設から現在まで幾多の困難を乗り越え、心血を注いで当会に尽力し支えていただいた職員、関係者、またご支援いただいた地域医師会、佐倉市・世田谷区並びに関係省庁、地域住民の皆様方、そして常に温かいエールを送っていただいていた役員・理事の方々、すべての方々に深甚なる感謝を捧げます。

鮎川義介氏という稀代の実業家の篤志によって時の国民病とされた結核の研究と治療を目的とする医療機関創設が構想され、その主治医であった田川重三郎氏の努力と幅広い人脈によって実現された当会は、公益事業という命題を掲げてのスタートでありました。現新橋の日産厚生会診療所を泉源とし、遠山実氏の実行力によって本格的な結核療養所として大きく育った佐倉厚生園を核として1948年に公益法人の活動を開始し、その後、都心部の活動拠点として開設した玉川病院と玉川クリニックを加え、現在の姿に至ります。

しかし疾病構造の変化によってその医療は大きな変換を強いられました。結核医療から癌、高血圧、糖尿病などの成人病とされた疾患や高齢化社会の訪れに対応したりハビリテーション、療養期医療、また都心部における健診・予防医学への取り組みなどへと対応してきました。その機能変換期には非常な苦難を四事業所全てが経験しています。またこの時期には目的とする公益事業の実態が不明確となり、公益法人の意義と自負が揺らいだ時代だったともいえます。しかし、2015年の公益法人法の改定を機に本会の基盤を“臨床医学研究による社会的貢献”と明確にしたことによって再び時代における公益事業への力強い歩みを進めています。

節目の75周年直前の3年間は新型コロナウイルス感染症のパンデミックによって世界中が苦悩し、当会の各施設も大きなダメージを受けました。しかし怯むことなくこの感染症と対峙し医療も研究活動も継続して、公益法人としての責務を果たしてきました。

公益財団法人日産厚生会は社会貢献を専らにする“公”のマインドで、自らの責任によって最善の医療を行う“私”の覚悟をもって、日本の医療に貢献してまいりました。これからも公益財団法人日産厚生会を見守り、ご支援いただきますようお願い申し上げます。



創立75周年に寄せて

日産化学株式会社 特別顧問
公益財団法人日産厚生会 副理事長 宮崎 純一

日産厚生会が創立75周年を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。

私が当会の運営にご縁を頂いたのは2011（平成23）年からですが、それ以前より、玉川病院、日産厚生会診療所で診察・検査でお世話になっていました。医学の素地がまったくない私が何かしら貢献できるとすれば、利用者目線での見方であり、専門の経理財務・企業経営からの助言だろうと思ひ、何とかここまで職責を果たすべく努力して参りました。

利用者目線で見ますと、玉川病院・診療所の素晴らしい点のひとつは、患者さんに寄り添う温かい姿勢です。先日受診待ちでソファーに座っていたところ、外来患者さんの自宅へ、看護師さんが電話で「体調が戻るまで無理して来院しないで、予約は延期して大丈夫ですよ」とやさしく話しているのが耳に入りました。あらためて通院の待ち時間の度に周りを見渡すと、方々で患者さんとスタッフの血の通ったコミュニケーションに気づきました。電子化が極まった大病院では、患者さんとスタッフが、ディスプレイを介してつながるだけに感じられるなか、極めて印象的です。

厚生会のユニークな特徴は、病院・診療所に加え、介護老人保健施設、訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所と、幅広い事業領域で利用者の人生のさまざまなシーンを支えていることです。2013年の公益財団法人化を契機に、事業所間のシナジーも高まりつつあると感じています。また、大きな使命である臨床研究では、2014年に医学研究所が設立されたことを機に、各事業所でのさまざまな研究活動が一層活発になり、毎年開催されている医学フォーラムでは発表者の熱意が伝わってきます。

玉川病院には、引き続き厚生会の核として、今後も新棟建築計画の実現をはじめとして、大きな発展を期待しています。二子玉川地域は、近年の大規模再開発により、「住む人、働く人、訪れる人」が集まる複合的な魅力を持つユニークな街として成長し、東京の他地域に比べ、駅や商業施設の利用者も格段に増えています。玉川病院には、この発展する地元根差した病院として、街とともに一層成長していくことを願っています。

足元では、厚生会のすべての事業所は、コロナ対応に多くの経営資源を投入せざるを得ず、一般人の想像を超えた苦闘の連続であると推察いたします。しかし、歴史が示す通り、パンデミックはいつかは終息するものです。その時、厚生会は、困難な戦いの経験をエネルギーに転化させ、温めてきた未来の姿に向かって果敢にチャレンジしていくと確信しております。



創立75周年に寄せて

テクノベンチャー株式会社 代表取締役
公益財団法人日産厚生会 理事 鮎川 純太

この度の創設75周年誠におめでとうございます。謹んでお祝い申し上げます。

一言で75年と申すことは簡単ですが、日本が第二次世界大戦敗戦直後、すべてが混乱と貧困の直下にあった時期に、貴財団が設立された事実は並大抵ではないことを意味しています。

衛生状態も最悪であった当時、結核治療をはじめとする医療施設の充実は急務でありました。その意味でも医療機関として、貴財団の果たしてこられた軌跡は、わが国戦後復興と発展の歴史の一頁と申し上げても過言ではないと存じます。

直近数年間、世界は未知の病、COVID-19からの脅威に晒されることになりました。多くの医療機関が治療協力を消極的な状況のなか、貴財団は国難を克服する伝統を発揮され、極めて積極的な患者受け入れ等の活動を進めてこられたことは、地道ながらわが国現代医療機関の鑑であると申せましょう。

他方、わが国の多くの医療機関において、経済的健全性を組織的に維持しきれないところが増えつつあります。そうした状況下、貴財団におかれては、財政面においても堅実かつ健全な運営を永年にわたり続けてこられたことも特筆すべき事実ではないかと存じております。

改めて申すまでもなく、スーダン内戦やロシア・ウクライナ戦争は、もはや対岸の火事ではなくなり、東アジア各国間の関係も、あらゆる面で緊張が顕在化しつつあります。

よってわが国においても、いつ、なにごとが起きてもおかしくない時代へと突入しつつあるのではないかと存じております。

正に困難な時代にあって培ってこられた貴財団の歴史と遺伝子は、医療機関として、今後さらにその真価を発揮して行かれるものと存じ上げます。

貴財団の益々のご発展を衷心よりご祈念申し上げます。



玉川病院との長いつきあい

玉川医師会 会長 吉本 一哉

日産厚生会が創設75周年を迎えられたとのこと、喜ばしくおめでとうございます。日頃からお世話になっている玉川病院は1953（昭和28）年に結核病床を中心として開設され、現在は総合病院として地域に愛される病院として存在しています。

私が玉川病院との関係を持ったのは、今から32年前の1991（平成3）年の4月から1年間、医局の出張で消化器内科の医師として勤務したのが最初です。消化器の検査のほか、多くの患者さんを診させていただきました。その頃は今と病棟は少し異なり、少し離れたところに6病棟という結核病棟があり、そこの患者さんも診ていましたが、長期療養病棟で患者さんが生活をしており、初めて「病気療養」という概念を体験しました。今はその面影もなくなってしまいましたが、いい体験であったと感じるとともに懐かしくも感じます。玉川病院は今でも高台の奥の方に位置し、知らないところに病院があるとは判らないと思います。病院の設計は確かホテルの設計をされた方がして、エントランス中央には噴水が出る装置がありましたが、一度も使われているのは見ませんでした。外来は広くつくられており診察もゆったりさせていただき、慌ただしい感じはありませんでした。

2001年には父の跡を継いで九品仏に開業し、はや22年が経過しました。玉川病院内科には私の医局の後輩がずっと継続的に勤務されており、理事長である外科の中嶋先生とは同じ消化器で勤務時代大変お世話になりました。開業してからは「困ったときの玉川頼み」という感じで、お願いすると入院を受け入れてくださり、いつもお助けいただきました。

現在は和田義明先生が院長ですが、私と年齢は同じでいつも気さくに話してくれます。この3年は新型コロナウイルス感染症で玉川病院にはさらにお世話になりました。当初PCR検査をする場所が確保できず、世田谷区とドライブスルー式の検査をしていましたが、常設の施設を探していたときに、間借りさせてもらう形で玉川医師会PCR検査センターをつくらせていただきました。その後個別の医療機関でできるようになるまで本当に助かりました。

これからも玉川地区の中核病院として存在していくわけですが、災害拠点病院にも指定され震災や災害時には医師会と協力しながら地域住民を守って下さるようお願いいたします。今後の益々の発展を願うとともに、今後とも公私ともに長いつきあいをよろしく願っています。



創立75周年に寄せて

世田谷区医師会 会長 窪田 美幸

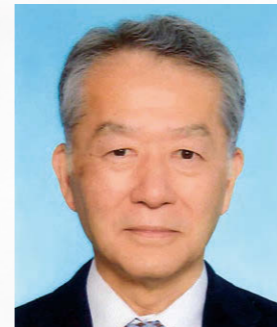
公益財団法人日産厚生会におかれましては、この度、創立75周年を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。また、創立以来、国民の健康を第一に考えた事業を多く展開され、国民生活の健康保持と向上に貢献されておりますことに対し、深く敬意を表します。

貴会の業績は枚挙に暇がありません。世田谷での業績だけでも、1953（昭和28）年世田谷区内に開設された玉川病院では、開院当初は、結核病床を中心とした入院施設として東京都の医療体制を支えられました。現在は、二次救急病院として多数の救急患者を受け入れられている一方で、総合診療科の全人的な診療体制の設置、気胸研究センター、股関節センターやスポーツ外来などの専門性の高い医療にも力を入れておられます。また、地域医療の密接な連携については、理念として「最新最善の医療をめざし社会的貢献を果たす」を掲げ、世田谷区民を支えていらっしゃいます。

2020（令和2）年1月より新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行により、未曾有の事態を経験しております。全世界で約6億を超える人が感染し、約700万人の方が命を落としており、感染症において人類に対する最大の脅威となりました。日本においても、大型クルーズ船で集団感染が発生し、その患者の受け入れ対応や、専用病棟を設けての帰国者・接触者の対応に特化した診療もおこなわれ、当会運営のPCR検査施設の診療へのお力添えもいただき、改めまして感謝申し上げます。現在も玉川病院では、新型コロナウイルス診療と通常診療の両立、救急受け入れ困難な時であっても変わらず救急医療も守り続けていただき、世田谷区だけでなく、区西部・区西南部医療圏における急性期病院の役割を果たされており、重ねて感謝を申し上げます。

さて現在、医療・医学が日進月歩する一方で、未知なるウイルスの出現により、複雑化する医療への対応や我が国における医療提供体制の新たな課題と展望が顕在化しており、医療関係者のご協力と連携が、これまで以上に不可欠となっているかと思えます。今後、さまざまな状況の変化に柔軟に対応をしていくためにも、当会においても、地域医療体制に万全を期すとともに、健康保持増進に尽力して参る所存でございます。貴会にも、是非、お力添えいただけますと幸甚に存じます。

日産厚生会の益々のご発展と皆様の弥栄を祈念申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。



佐倉厚生園の思い出

印旛市郡医師会 会長 菅谷 義範

日産厚生会創設75周年おめでとう御座います。

また、佐倉厚生園病院様には日頃より印旛市郡医師会の活動に御理解と御協力を頂き有難う御座います。加えて地域の中核病院として御尽力頂き感謝申し上げます。

私は、生まれが佐倉ですので、2014（平成26）年に佐倉厚生園が佐倉厚生園病院に名称変更されてからも、子どものころからの佐倉厚生園という呼び方を今でもしてしまうことがあります。佐倉厚生園が1942（昭和17）年の開園ですので、佐倉厚生園病院は佐倉厚生園から数えて80年を超えて地域の医療を支えて頂いています。2011年まで、結核の治療と予防を担って頂いていたので、結核療養所の印象が強かったのですが、その後現在の体制を取られて、内科疾患を中心とした診療とリハビリテーションにも力を入れていらっしゃると思いますので、ますます充実した病院として地域医療に貢献して頂いています。現在、新しい建物になっていますが、以前の病院と同じように正門から病院までのアプローチには落ち着いた佇まいがあり、春には桜もきれいで、緑の多い環境の中で療養には最適の病院と思っています。2009年の結核病棟の廃止は残念でしたが、疾病構造の変化で結核が減少したこともあり止むを得ないことと思っています。

現在、病院に隣接する旧堀田家住宅と旧堀田正倫庭園は、国の重要文化財と名勝に指定されています。以前は住宅・庭園共に厚生園で管理されていて、住宅には入れませんでした。庭園には自由に入ることが出来たので高校生頃までは時々遊びに行っていました。借景を取り入れた美しい庭園で、松の配置や手入れの行き届いた広い芝生が素晴らしく、ゆっくりした時間を過ごした思い出があります。友人が遊びに来た時にも案内して、美しい庭園を見てもらいました。

現在、名誉院長をされていらっしゃる遠山先生は、小学校と高校での先輩で私の開業当初から印旛市郡医師会でお世話になり、私が医師会の理事を担当させて頂いてからも御指導を頂いていました。また、院長の長尾先生とは、東邦大学医療センター佐倉病院の院長をされていらっしゃった時からの付き合いで現在医師会の監事をお願いしています。お二人と御一緒に仕事をさせて頂いているのも大切なご縁ですので、このこともあり、佐倉厚生園病院は身近な存在となっています。

今後も、地域医療を支えて頂き、合わせて素晴らしい環境の保全にも引き続き力を入れて頂きたいと思っております。

結びに、日産厚生会様並びに佐倉厚生園病院様の益々のご発展をお祈り申し上げます。



創立75周年に寄せて

世田谷区長 保坂 展人

本年、公益財団法人日産厚生会が創立75周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

貴会におかれましては、1948（昭和23）年、当時の国民病とも呼ばれた結核の撲滅を目的とする財団法人として創立されたと伺っております。戦後、時代が大きく変動した昭和から、平成の時代を経て、令和の新時代に至るまでの長きにわたり、疾病の予防・治療に寄与するための臨床医学の研究に取り組み、大きな成果を上げてこられました。また、時代の変遷に伴い、保健医療福祉を取り巻く環境が大きく変化するなかで、公益の財団として安定した医療・介護等の提供に取り組まれていることに、心より深く敬意を表します。

さて、当時、結核患者の入院施設拡充が社会的急務であったことを背景に、1953年、世田谷区瀬田に、結核病床を中心とする210床の病院として日産厚生会玉川病院が開設されました。以来今日までの間、貴院には地域の医療・福祉の推進に多大なるご尽力を賜っております。

現在、玉川病院におかれましては、東京都の二次救急医療機関として、年間4,000台以上の救急車を受け入れていただいております。急性期から、病気が安定し改善していく回復期に至るまでの地域医療を支えていただいております。

また、今般のコロナ禍におきましては、新型コロナウイルス感染症診療と通常診療を両立し、発熱外来の設置はもとより、新型コロナウイルス感染症入院重点医療機関として患者の治療に携わられるなど、現場の最前線で、日々、多大なるご尽力をいただき、地域の医療提供体制の確保に大きな役割を果たしていただいております。この場をお借りして、改めて深く感謝申し上げます。

世田谷区では、誰もが住み慣れた地域で、支えあい、安心して暮らせる地域社会の実現に向けて、地域包括ケアシステムの更なる充実に取り組んでいるところです。今後の高齢社会の到来や家族形態の変化等に加え、新型コロナウイルス感染症の流行に伴う生活様式の変化等により、医療や福祉をめぐるニーズや課題は多様化・複雑化してきております。

貴院におかれましては、引き続き、地域に根ざした総合病院として、世田谷区の地域医療を支える役割を果たしていただけるよう、格別のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、このたびの公益財団法人日産厚生会創立75周年を契機として、貴会の益々のご発展と、関係者皆様方のご健勝とご活躍を祈念いたしまして、お祝いのご挨拶いたします。



創立75周年に寄せて

佐倉市長 西田 三十五

このたび、公益財団法人日産厚生会が創立75周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

貴会は、1948（昭和23）年に結核の予防・診療・研究を目的とし創立、現在では生活習慣病を中心とした慢性疾患病院としての活動や介護保険法にもとづく介護保健施設や訪問看護ステーション、居宅介護支援サービスなど包括的な医療体制を形成され、私ども佐倉市におきましても地域医療の発展に寄与されるとともに住民福祉の向上に多大なるご貢献を賜っておりますことに、厚く御礼申し上げます。

また、長年にわたり地域医療を支えてこられた中嶋昭会長をはじめ、歴代の病院長、並びに関係者の皆様方のご功績に対して、深く敬意と謝意を表する次第でございます。

さて、近年、新型コロナウイルス感染症は、医療現場等に多大な影響を与え、地域医療を取り巻く環境は厳しい状況下でございます。

今後につきましても、高齢化の進展とともに地域医療へのニーズも大きく変化し、時代の変遷に対応した、医療や介護などの需要がますます増加していくと予測されます。

こうしたなか、貴会の疾病の予防と治療に関する臨床医学の研究を使命とし、その研究成果を日々の医療・介護支援活動に反映させ、最善の医療の実践を理念とした活動は、大変心強く、貴会の果たす役割は、国民の安心感の醸成につながるものと大いに期待しております。

佐倉市では、子どもから大人まで、すべての市民が主体的に健康づくりに取り組み、いつでもいきいきと生活できる「健康のまち佐倉」の実現を目指しております。各種健診（検診）や予防接種、保健指導などの保健事業の充実、また、市民が病気やけがをしたときにも安心して医療を受けることができるよう地域医療体制のさらなる充実のため各種施策の推進に、「オール佐倉」で取り組んでまいりますので、引き続きのお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

結びに、公益財団法人日産厚生会が創立75周年を契機として一層のご発展を遂げられるとともに、関係者の皆様のご健勝を心から祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。